

オルコット『若草物語』から トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』への影響 —文体、話題、そしてナルシシズム—

浅山 龍一

〈序〉

『トム・ソーヤーの冒険』(1876)(以下『トム・ソーヤー』)が登場するまでの、英米の子供を主人公にした代表的な文学作品は、ディケンズの『オリバー・ツイスト』(1838)やウォーナーの『広い広い世界』(1850)、キャロルの『不思議の国のアリス』(1865)、アルジャーの『ボロ着のディック』(1868)、オルコットの『若草物語』(1869)やオールドリッチの『悪童物語』(1869)であった。ディケンズ、ウォーナーは宗教的、教訓的でセンチメンタル、アルジャーも教訓的でセンチメンタル、キャロルはファンタジック、オールドリッチはタイトル(英語では*The Story of a Bad Boy*)の割にはノスタルジックでセンチメンタルな物語を書きあげ、オルコットののみがより現実的な子供の世界を描いたといえる。南北戦争を背景とした現実的な社会環境と家庭描写(特徴は質素と禁欲)の中に、自己主張の強い子供らしい子供たちを登場させ、彼らの成長するようすを描く子供好みの作品であった。案の定、子供たちは飛びついて読んだ。『若草物語』と彼女がその後書き上げた*Little Men*(1871)(やはり活発な子供たち、とくに男の子たちを中心とした成長物語。日本では『第3若草物語』と呼んでいる)のおかげで、トウェインが『トム・ソーヤー』(執筆開始は1870年と推定できる¹⁾)を書き易くなったと筆者は考えるものである。執筆開始前の1869年の*Buffalo Express*紙に詩を載せて、*Some of the Little Women*(若草物語の誰かさん)

¹ 浅山龍一「『トム・ソーヤーの冒険』の視点について」(創価大学英文学会『英語英文学』Vol.15、No.1、1990年)参照。

とサインしているし (Gribben, 14)、オルコットの伝記作家も「トウェインはオルコットを追うように『トム・ソーヤーの冒険』を書き、児童文学の市場に入り込んだ」(Reisen, 282) と評している。なお、トウェインの作品はオルコット作品のように道徳的・禁欲的ではなく、とくに(『トム・ソーヤー』の続編である)『ハックルベリー・フィンの冒険』はオルコットに「下品で子供向けではない (obscene and unsuitable for children)」と批判されたのであるが、結果的には子供たちの(そして子供時代を懐かしむ大人たちの)心をつかみ、『トム・ソーヤー』に続いてベストセラーになる。トウェインはある時、「(著名な) ルイザが『ハックルベリー・フィン』を批判してくれたので、この本はよく売れた。私はルイザに感謝している」² (Reisen, 232) と皮肉を言っている。彼がオルコットを強く意識していた証拠といえよう。本論文は、オルコットの『若草物語』にみられる文体、話題その他がトウェインの『トム・ソーヤー』にどのように反映されているかを見ていこうとするものである。テキストには A Norton Critical Edition の *Little Women* と Signet Classic の *The Adventures of Tom Sawyer* を用いる。引用部分の日本語訳は、それぞれ松本恵子訳『愛の若草物語』と大久保康雄訳『トム・ソーヤーの冒険』を参考にした。

〈その1〉男っぽさ——とくにジョーとトムに見られる——

『若草物語』を見てみよう。まず目につくのは情景描写と少女たちの^{せりふ}台詞のリアリズムである。次女のジョーが多く使うスラング(俗語)とナマリ、気取った4女エイミーが使っては間違える big words、お姉さん顔の長女メグや聖女のような3女ベスがうっかり使うスラングは、荒い男っぽい口語表現を少女たちが使う点において不釣り合いでユーモアを生み出している。一方で、戦争中という荒っぽい時代の臨場感をかもし出している。オルコット以外の児童文学には感じられなかったものである(〈序〉に挙げた作品のどの主人公も——アリスが curious の比較級を curiouiser と言う

² Harriet Reisen は、Beverly Lynn Clark 編著 *Louisa May Alcott: The Contemporary Reviews* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), P.45 に、トウェインのこの言葉があると紹介している。

などの活用間違い以外は——きちんとした英語を使っていた)。始めの1、2ページを見ても、エイミーはplenty ofをlots ofと言い、ベスがpractise wellをpractise goodと言う。ジョーはworkをgrubと言い、papaをpa、company(仲間)をset、I'm notをI ain'tと言う。メグも人を軽蔑的に、pigだとかgooseだとか呼ぶなど、あちこちに男っばい、今日的アメリカ口語表現が見られる。

作品は、ジョーが敷物(rugs)の上に寝そべて不満を言う、乙女らしくないところから始まる。戦争中で男たちが前線で戦っているときに、家で楽しくすることは控えましょうという母の言葉により、今年はクリスマスプレゼントもないのである。子供たちは不平を言い合う。大人の都合に子供たちは満足しないのである。一番真面目なベスが、(何がなくても)両親がいる自分たちは幸福だわと言ったので、暖炉の火も明るく燃え上がった(=教訓的描写)——しかし、ジョーが「お父さんはいないわ」と言ったので、火はまた元気をなくした(=現実的描写)——といった調子で進む。道徳的な高邁さが現実(リアリズム)に引き戻されるところにユーモアが生まれている。少女たちが自分たちの不幸を主張し合い、そこから内輪もめになるところが子供らしく滑稽である。このようなリアルな家庭描写は、英米児童文学としては初めてであろう。また、舞台は同じ町の中(マーチおばさんだけが離れて住んでいる)であり、家庭、隣家、近所、学校、近くの川といった身近な子供らしい活動範囲ですべての事件は起こる。『トム・ソーヤー』の前触れといえる。

ジョーは15歳。淑女ぶる(lady-like)のが嫌いである。気難しいマーチおばさんに気に入られておばさんの話し相手のアルバイトをしているが、「窓から飛び出すか、おばさまを殴りとばしてやりたいわ(box her ears)」と愚痴る。言葉使いが乱暴で「男の子に生まれなかったのが残念」と思っている少女である。エプロンのポケットに両手を突っ込んで口笛を吹いている。靴の履き方も男っばい(以上、Ch.1)。好みの場所は屋根裏で、時間さえあれば、りんごをかじりながらネズミと一緒に本を読んでいる。服装に無頓着で、舞踏会に呼ばれても、後ろにかきざきと焼け焦げのあるドレスのままで行こうとする。後ろを見せないようにすればよいと言う(Ch.3)。

ジョーが窓から出入りする場面が出てくる。「裏口の窓から低い玄関の屋根へ出て、土手に飛び降り」とある(Ch.14)。また、ベスが病気になる、医者を呼びに行く

ために、塀を飛び越えて行く隣家のローリー少年を満足げな微笑で見送る。「あの、実に頼もしいわ」(Ch.17)と思う—ジョーの活発な男っぽさが随所に出ている。

エイミーとジョーの会話が象徴的なので以下に紹介しておく。ジョーが家の中で口笛を吹き始めたときのことである。

“Don’t, Jo; it’s so boyish.”

“That’s why I do it.”

“I detest rude, unlady-like girls.”

“I hate affected, niminy piminy chits.” (Ch.1)

品よく喋ろうとするエイミーと対照的にジョーの台詞は短く、口語的・直截的で (detest に対し、hate という)、スラング混じりであり、男っぽさがよく出ている。(『不思議の国のアリス』でアリスが、水タバコを吸う男っぽい芋虫の返答が短いのにたいして「答えが短いのは失礼だわ」と怒っていたのを思い出す。19世紀において、無愛想な喋り方は男っぽさを示していたといってよい。)

『トム・ソーヤー』を見てみよう。

まず、文体のリアリズムである。『若草物語』では1ページに1、2箇所直截的口語表現やスラング (俗語) 等が出てくるぐらいであり、最年少のエイミーの言葉の使い間違いは微笑ましい (彼女の学校の友人たちはそうとは知らず、彼女の言葉遣いを「とても素敵」(Ch.4) と讃えているところがユーモラス) のだが、『トム・ソーヤー』には口語、スラング、そして中西部の田舎らしいナマった表現がたっぷり出る。最初の2ページほどを見ても、ポーリーおばさん (信心深い女性) が、I’m sure を I lay と言い、「～に勝るもの」を the beat of ~ と言い (どちらもスラング)、I might have thought を I might ‘a’ thought と言い、what you have been doing を what you been doing と言い (ナマリ)、「もの」を truck と言っている (スラング)。「ぜったい許さない」を I’d skin you. 「いまましい」を Hang the boy. と言っける。乱暴な男っぽい言い回しである。ことわざも引用間違いをして、Old fools is the biggest

fools there is. (本当は、There is no fool like an old fool.) と言って気にしないし、主語の単複による動詞の活用変化の間違いも気にしていない。learnをteachの意味で使う(スラング)。I'm notをI ain'tと言う他、spoilをspile、layingをa-laying、Lord have mercy on me.をLaws-a-me.、almostをmostのように言う(ナマリ)。veryをmightyと言う(スラング)。男っぽい単語や表現の連続である。

作品は、トムが学校に行かないで(育ての親である)おばさんに見つからないように隠れているところから始まる。『若草物語』と同じく家庭的である。そのうちおばさんにつかまるが、咄嗟におばさんの注意をそらし(「おばさん、危ない!うしろ!」)、逃げる。そしてこの日も学校をさぼり、川に泳ぎに行く。—養子なのに、おばさんに感謝していない。むしろ、自由を求める男っぽい、腕白少年の物語である。舞台は家庭、学校、教会、近所、墓場、洞窟、川に浮かぶ島であり、同じ町の中である—『若草物語』と変わらない。

さて、トムは男のプライドを持つ少年である。担任の先生の引き出しに入っていた本を、好奇心のあまりこっそり読んで、1ページを破ってしまった少女ベッキーが、たまたまそれを目撃したトムに告げ口されると思って、「わたし、ムチでぶたれる。…意地悪するならすればいいわ」とトムを攻撃し、いなくなる。トムは哑然として思う。「女の子って、なんて変わっていてバカなんだ。先生にぶたれたっていいじゃないか。それが女の子の弱点だ。…臆病なんだ。おれが言いつけたりするものか。まるっきり度胸がない。かまうものか」(Ch.20)。親友ハックも女性蔑視である。宝探しの最中に、(仲直りをした)ベッキーと結婚するというトムに「お前、頭がおかしい。…結婚なんか最高にばかげている。おれの父ちゃんとおふくろを見ろ。しょっちゅうけんかだ。…女の子は皆同じだ。皆、相手をひっかくぜ。よく考えたほうがいいぜ」(Ch.25)と言う。また、トムがハックに山賊になる計画を打ち明ける時、人質にとった人間をどうするかが問題になり、トムはミノシロキン(ransom)の話をする。「1年たっても人質の友だちから金が届かなかったら殺す。しかし女は…殺しちゃいけない。…丁ねいに口をきかなきゃいけない。—どの本にもそう書いてある。女は山賊を好きになるんだ」(Ch.33)という調子である。トムの示す騎士道精神(たぶんトムは『アイバンホー』等の中世騎士物語を読んでいる。ロビンフッドごっこをするぐ

らいだから)は男性優位の考え方からくる。その他、鞭でぶたれるとか、バカだとか、けんかとか、殺すとか乱暴な単語が並んでいる。また、トムが口笛の練習をして、ある吹き方をマスターしたときの喜び。「過去のいざごぎをすべて忘れた」(Ch.1)とある。口笛は男っぽい前向きの生き方の象徴であろうか。新顔の少年と(ナマった短い台詞のやりとりの後)けんかをして、二人とも英雄気分(glory)を味わう。トムが勝つが、相手は逃げるふりをして、トムの後ろから石を投げつける。トムは「卑怯者」(traitor)を家まで追いかける—騎士的である。(ここに見られる「英雄気分」については、改めて述べる。)トムも服装には無頓着である。新顔とけんかになったのも、(縄張りを荒らす?)「見慣れない人間」が現れたのが一因だが、「服装もよかった—日曜でもないのに立派な服を着ていた。…ボタンをきちんとはめた服を着ており、靴をはき、リボンの首飾りまでつけており、都会人らしい雰囲気があってトムの勘にさわった」とある。男っぽい発想である。

トムも塀を乗り越え、窓から出入りしている。物語の最初におばさんから逃げるが、「あつという間に高い塀を乗り越えて向こう側に姿を消した」(Ch.1)。後に、トムが(学校をさぼって)水泳に行った証拠を見つけ告げ口をした義弟のシッドをやっつけた後も、やはり塀を乗り越えて姿を消す。「門というものをを用いる時間はなかった」(Ch.3)。ハックと夜中の冒険。ハックの合図(ネコのなき真似)を聞いて、1分も経たないうちに窓から抜け出し、「屋根の上を四つん這いに…、それからまき小屋の屋根にとびうつり、地面にとびおりた」(Ch.9)。ジョーそっくりの行動場面である。窓から寝室に入るのもしょっちゅうである(Ch.10)。

その他、ジョーの正義感の強さについても触れておく。彼女は騎士物語である『ドン・キホーテ』(Ch.2)や『アイバンホー』(Ch.5)を読み、自分を犠牲にして弱者を助ける『アンクル・トムの小屋』(Ch.4)を読んでいる。勧善懲悪の、そして弱者を思いやる騎士道精神を身につけているといえる(トム・ソーヤーの男性優位からくる騎士精神とは少し違う)。ローリーのイギリスの友だちが遊びに来て、ジョーもいっしょにクロッカー(ゲーム)をする場面がある。イギリス人フレッドが、打った球を落ちた場所からそっと動かしたのを目撃したジョーが「アメリカではインチキをやら

ない。あなたの国ではやるのね」と問い詰める。フレッドは無視して、ジョーの球を打ち飛ばす。結局ジョーが勝つのだが、仕返しはしない。「ヤンキーは敵に寛容さを示す」とフレッドに宣言する。メグがあとからジョーを褒めると、「本当は殴りとはしてやりたい(box his ears)。今だって、煮えくり返っている(It's simmering)」(乱暴な言い回し)と言って、フレッドを睨む(Ch.12)。正義感と騎士道精神を感じさせる場面である。

トムも、既に述べたように、後ろからものをぶつける「卑怯者」を許さないし(Ch.1)、シッドの告げ口(本当は水泳に行ったトムが悪いのだが)も許さなかった(Ch.3)。そして、「告げ口」どころか、むしろ、ベッキーの代わりに罪をかぶる場面がある(Ch.20) — 正義感と弱者を思いやる騎士道精神が見られるところである。

呼び名の短縮も(短さにおいて)男っぽさを示すといえるかもしれない。ジョーがローリーに「マーチ嬢(Miss March)」と呼ばれたときに、「わたし、マーチ嬢でなくて、単なるジョーよ(I ain't Miss March, I'm only Joe)」とナマって答える。ローリー「僕も単なるローリーです。…セオドルというのですが、嫌いです。仲間がドーラとか女ふうに呼ぶので。皆にローリーと呼ばせています」ジョー「私も、自分の名前が感傷的なので嫌い。ジョゼフィンなんて言わないで、ジョーと呼んでほしい。どうやって、ドーラをいうのをやめさせたの」ローリー「ひっぱたいてやったんだ(I thrashed 'em)」(Ch.3)。ナマリとともに少年らしい活発さを感じる。なお、短縮せずに、あるいはフルネームで呼ぶときは、相手を責めるときのようなものである。メグがジョーをたしなめるときに「ジョゼフィン」(Ch.1)と言うし、マーチおばさんがジョーを呼びつける時も、何度も「ジョジ・フィン(Josy-phine)！」(Ch.4)と言う。エイミーがジョーに冷たくされて、フルネームを使い、「ジョー・マーチ、覚えていらっしゃい」(Ch.8)と罵る場面もある。

トムがベッキーに自己紹介する場面を見てみよう。「きみの名前は?」「ベッキー・サッチャー。あなたは? ああ、知ってるわ、トマス・ソーヤーでしょう?」「それは叱られるときの名前だ。叱られないときはトムだよ。だからトムと呼んでくれないか」(Ch.6)とある。

以上、男っぽさが『若草物語』から『トム・ソーヤー』に受け継がれているといえないだろうか。使われた文体も話題もよく似ている。

〈その2〉学校の事件とナルシズム —エイミーとトムを中心に—

エイミーが学校の事件を家族に話す場面がある (Ch.4)。「学校で恥をかくことは悪い男の子以上に耐え難い (trying) ものだわ」。比較級の使い間違いはアリスと同じである。スージー・ペルキンスがきれいな紅い玉の指輪をしているのがうらやましかった。ところがスージーがデーヴィス先生の顔を石盤に描いた。大きな鼻と背中にこぶがあり、口から風船のようなものが出て、「あんたたち、わしの目はあんたたちの上にありますぞ」と書いてある。子供たちは大笑い。気づいた先生がスージーを前に呼び出す。「スージーは恐怖におののいていたわ (paralyzed with fright)」(エイミーの単語の間違い)。先生はいきなり彼女の耳を引っ張って、教壇の上に引きずり上げ、石盤を皆の方に向けさせて30分立たせておいた。皆、神妙になり、スージーは泣いた。エイミーは一部始終を家族に伝えながら、「私だったらそんな堪え難き屈辱 (agonizing mortification) に甘んじられないわ」と言う。難しい単語を使えたので満足げである—学校で模範生徒であるエイミーの虚栄心、あるいはナルシズムが大げさな語句表現とともに表れている。

また、参観日の話 (Ch.7)。ある名士が来た。エイミーの描いた地図が褒められ、エイミーは得意顔であった。裕福で意地悪なジェニー・スノーは嫉妬と復讐心に燃えていた。名士が「お決まりの気の抜けた」お世辞を言って帰ると、ジェニーがデーヴィス先生に告げ口をする。実は、学校ではチューインガムと同じく塩漬けライムは禁止であった。先生はチューインガムを撲滅した後であり、違反者は鞭で打つと反抗的な50人の女生徒たちに公言していたのだ。そこに、日頃ライムを貰っていたお礼にと皆の為にライムを用意したエイミーのことが告げ口されたのだ (エイミーは先生のお気に入りだった!)。先生はエイミーにライムを前に持って来させ、窓から捨てさせた! 彼女の手を出させ、鞭で打った。自尊心の強い (proud) エイミーはじっと耐えた。「休み時間まで教壇の上立っていなさい」と言われ立っていたが、友達のあわれみの顔や敵の満足した顔を見るだけでも耐えがたかった。15分間は1

時間に思われ、一生忘れることのできない屈辱と苦悩を味わった。15分後、「休み時間！」が宣言されたが、エイミーは所持品を持って、「永遠に」(forever) その場を立ち去った——大げさな表現に注意したい。

母に打ち明けると、母は夜になって「退学しても構いません。私は体刑には賛成できません」と言ってくれる。エイミーは「嬉しいわ!あのボロ学校が潰ればいい。ライムのことを考えると、わたし、悔しくて気が狂いそうですわ」と殉教者(martyr)のようにため息をついた——とある。

以上、エイミーのナルシズム(虚栄心、自尊心、自己陶醉)が大げさな表現とともに連続的に表れていた。

『トム・ソーヤー』の学校場面を見てみよう。よく似た世界が展開される。

まず、やはり石盤の話題がある(Ch.6)。トムは隣の席のベッキーの心をつかもうとして、そばに桃を置く。2度ほど押し戻されたが、3度目は、トムの石盤に「うけとってください。まだあります」と書いてあった。ベッキーは知らぬふりをした。続いてトムはベッキーに見えないように、何かを石盤に書き続ける。ベッキーは好奇心に負けて「見せて」と言う。家と煙突の絵であった。「人間を描いて」というと怪物の人間を描く。「すてき。次は私を描いて」…そのうち、トムは少女に見えないように手で隠しながら、何かをしきりに書く。「見せて」「いやだ」と押し問答が続き、ついに見せる。“I love you”であった。「まあ、いやな人(You bad thing)！」(口語表現)と顔を真っ赤にしてぴしゃりとトムの手を打つ。嬉しそうだった。——このとき、トムはゆっくりと、だが力をこめて耳をつかまれ、ぐいぐい引き立てられる。先生に教室の中を本来の彼の席に連れていかれた。耳がひりひりしたが、心は喜びにあふれていた。うわついで、次の地理の時間は、湖と山の名を、山と川の名を、川と大陸の名を取り換え、つづり字の時間もありとあらゆる失敗をする。

とうとう、教室の中で、勉強に力が入らなくなる(Ch.7)。25人の生徒たちの言葉はミツパチのうなりに聞こえた。ポケットに手を入れるとダニを入れた器があった。ダニを石盤に乗せてつづいて遊び始めた。隣の席のジョーが興味を示した。石盤に線を中央に引き、ふたりでダニをつづいて遊び始め、いつしか夢中になり口論にな

った。すさまじい平手打ちがトムの肩に当たり、続いてジョーに当たった。先生であった。2分ほど二人の服からほこりが舞った。生徒たちは面白がった——とある。

どちらも石盤を中心に、子供たちの戯れと自己陶醉、先生の登場、というパターンで描かれており、『若草物語』そっくりである。そして、生徒たちが他人の不幸を喜ぶのはナルシズムの現われといえる。

名士の参観の話もある (Ch.4)。日曜学校で、校長先生の「おなじみの型にはまった (of a pattern) 訓話」(『若草物語』そっくりの言い回し) ——終わりの1/3は誰もきいていない——の後、判事が参観に訪れた。先生たちは「いいところを見せよう」(show off) と夢中であった。先生も、女子生徒も、さらに判事自身も「いいところ」を見せようとする滑稽なようすが4ページにわたって書かれている。参観の最後は、(聖句を多く覚えた) 模範児童がチケットをもって歩み出て、皆の前で表彰される式典があり、何とトムが出て来た。皆が驚く。「新しい英雄」(the new hero) であった。彼はベッキーに見てもらいたかった。一方、(トムの婚約者だと思い込んでいた) エイミー・ローレンスはトムを誇りに思い、その喜ぶ顔をトムに見てもらいたかった。しかし、トムは見ようとしない。トムの迷惑そうな目つきが、いろいろなことを彼女に教えた。彼女は落胆し、嫉妬し、怒り、…すべての人、なかでもトムを憎んだ。——先生であれ、トムであれ、このエイミーであれ、周囲の注目を得ようとしたり、ひとりよがりなのはナルシズムの特徴である。

トムのナルシズムはそれ以前にも見られた (Ch.3)。ある時、トムは (悪いのはシッドなのに) 自分が叩きのめされたことでおばさんに強く抗議する。おばさんは一瞬戸惑ったが、間違いを認めたくない大人のプライド (=ナルシズム) のために、トムを逆に説教する。トムは隅にうずくまり、悲しみを誇大に表現した (exalted his woes)。彼はおばさんが心の中で彼にひざまずいてあやまっているのを知っていて、意地悪い満足感を味わった (morosely gratified)。自分が病気で死の床に横たわり、おばさんが許しを懇願しても壁に顔を向けたまま許さず、死んでいく場面を想像。また、自分が溺死し、傷ついた胸は鼓動を止め (at rest)、河から運び出される場面を想像した。「悩める少年よ (a poor little sufferer)、悲しみは今は終わった (at an end)」と思い、「トムは感動にむせん」。家を出て、川岸に行った。そのとき、転

校してきた名も知らぬあこがれの少女 (the Adored Unknown) (=後のベッキーのこと) が投げしてくれたすみれを思い出す。溺死した自分のことを知ったら彼女は悲しんでくれるだろうか。それとも他のすべての人と同じく、冷たく顔を背けるのだろうか。この想像は強い苦痛の快さ (such an agony of pleasurable suffering) をもたらし、「トムは思う存分楽しんだ」。あこがれの少女の家に行き、窓の下でしぼんだ花を持って横たわった。こうして自分は死んでいくのだ…。そのとき、空から降り注いだ洪水 (=彼女の家の2階から女中がザバーッと浴びせた水) が殉教者 (martyr) の死体を水浸しにした。—ナルシズム (自己愛) を表す、大げさな語句の連続である。『若草物語』にもあった「殉教者」という単語まで使われたのは、たんなる偶然の一致であろうか。

また、トムがベッキーの身代わりになって鞭に打たれる場面がある (Ch.20)。先生の本を盗み見て、その1ページを破ってしまったことで「わたし、どうしよう、どうしよう! 鞭でふたれるんだわ、これまで学校でふたれたことなんか一度もなかったのに!」と恐れおののくベッキーの様子は、『若草物語』でエイミーが母たちに伝えた、石盤事件で罰を与えられたスージーの様子 (Ch.4)、またその後、エイミー自身がライム事件のために先生に追いつめられ自尊心を傷つけられたときの様子 (Ch.7) とそっくりである。—その時、「破いたのはほくです (I done it)!」(ナマリ) と席から立ち上がるトム。…ドビンズ先生の折檻は、かつてないほど激しいものだったが、トムは自分の行動のすばらしさ (splendor) に感動して、声ひとつたてずに耐えた。放課後2時間の居残りを命じられたが、平気で受けた。刑期 (captivity) が終わるまで、校舎の外で待っていてくれる人がいることを彼は知っていた。ベッキーはつぶやく。「何て素敵 (so noble) なんでしょう!」—やはり、トムのナルシズムが出ている。騎士道的自己犠牲心からくる「英雄気分」はナルシズムといえよう。

場面 (=話題) も子供のもつナルシズムの描き方も『若草物語』そっくりである。

〈その3〉ナルシズムの衝突——エイミー対ジョーとトム対ベッキー——

『若草物語』の名場面のひとつは、妹エイミーのジョーへの仕返しとジョーのエイミーへの復讐であろう。ふたりのナルシズムの衝突である。

エイミーは姉たちが行く芝居に連れて行ってほしいと嘆願する (Ch.8)。しかし、自分を子供扱いし邪魔者扱いするジョーのことがしゃくにさわり、仕返しをすることにする (「ジョー・マーチ、覚えていらっしやい」)。何と、ジョーが書きためていた原稿を焼くのだ。ジョーの怒りが爆発! 「生きている限り、許さないわ!」とエイミーの顔をびしゃりと打つ。ジョーの数年間の努力が灰になったのだ。母に諭され、勇気を出して (=プライドを抑えて) 謝るエイミーに対し、「決して許さないわ」。ジョーは母が諭しても泣き続け、「あの子を許す価値なんかない (She don't deserve to be forgiven)」(ナマリ) ときっぱり。エイミーは自分から和睦 (peace) を申し込んで拒絶されたので、自尊心を傷つけられ、「謝らなければよかった」と思う。そして、何と自分のほうがジョーより人間的に優れている (her superior virtue) と自慢し始めた。しゃくにさわる (exasperating) 態度であった。彼女は人前で「善良な人間になろうなどと年中口で言いながら、ひとが立派なお手本 (a virtuous example) を示しても善良になろうとしない人がある」などと言いつける——ナルシシス的な大げさな自己愛表現が続く。

ジョーとローリーがスケートをするために凍った川に向かうが、エイミーがついてくる。姉メグの「そっとキスをするか、やさしいことをすればよい」というアドバイスがエイミーの趣味にかなっていたのだ (suited her) ——エイミーのナルシズム。ジョーはエイミーがスケート靴をはくのに手こずっているのに嫌らしい満足 (a bitter, unhappy sort of satisfaction) を覚える。妹が氷の薄い危険な所に近づいた! ジョーは気がついたが、小さな悪魔が「ほっておけばよい」と囁く。そして大惨事へとつながる——悪魔は自分の中にいるのだから、これは相手の不幸を喜ぶ、自分中心のナルシズムである。

『トム・ソーヤー』にはトムとベッキーのナルシズムの衝突がある (Ch.12)。トムが (エイミー・ローレンスのことで) 許しを乞うかのように、ベッキーの近くで他の子供たちと騒いだり、わざと倒れてみせたりする。しかし、ベッキーは聞こえるようにつぶやく。「ふん (Mf) ! 誰かさんは自分をずいぶん賢い (mighty smart) と思っているんだわ。いつも偉ぶってるわ (showing off)」。その後、トムと仲間のジ

ヨー・ハーパーの失踪があり、町全体が騒ぐ。ふたりの葬儀が行われ、何とふたりはそこに参列する！センセーショナルな出来ごとに人々は感動する(Ch.17) —町全体のナルシズムといえようか。

この自作自演の葬式事件で英雄になったナルシストのトムである(Ch.18)。人々の注目を集め、気づかないふりをするが、内心嬉しかった。小さな子供たちはつきまとわり、トムと同じ年頃の子供たちはトムがうらやましくてたまらなかった。ベッキーもトムを許し、近づこうとするのだが、トムは知らないふりをする！彼女が近くで顔を赤くしてはしゃぐと、トムの意地悪い虚栄心(vicious vanity)を満足させた。しかし、無視した。彼女がおずおずとトムを見ると、トムはエイミー・ローレンスに特別親しそうに話しかけた。ベッキーは苦しくなる。快活を装って、トムのすぐそばの少女に話しかけたりした。トムはエイミーを連れて去る。ベッキーは自尊心を傷つけられ、やがて目に復讐の色をうかべ、いまに思い知らせてやると誓う(She knew what she'd do) —ジョーに対する妹エイミーの台詞とそっくりである。ベッキーはわざと、アルフレッドと嬉しそうに絵本を読む。顔を寄せ合って。トムの血管を真っ赤に燃える嫉妬が走った(Jealousy ran red-hot)。ベッキーは自分が勝利を治めつつあるのを知り、かつて自分が悩んだ(suffered)と同じようにトムが悩むのを見て喜んでいた。トムは居づらくなって家に帰った。ベッキーはトムがいなくなったので、気が抜けてしまう。アルフレッドの言葉が耳に入らない。うるさいので痲癩をおこす。わっと泣き出し、行ってしまった。アルフレッドはあれこれ考えて事の真相を知ると、トムがたまらなく憎くなった。トムのノートが目に入り、あるページの上にインキを流す。ベッキーは窓からこれを見たが、黙っていて、トムが先生に鞭で打たれるままにしておき、永遠に(forever)憎んでやろうと決心する。 —ベッキーのナルシズム(自己愛)がよく出ている。『若草物語』で妹エイミーがジョーの原稿を焼き、『トム・ソーヤー』でアルフレッド(=ベッキーの代わり?)がトムのノートをインクで汚して、その後に騒動が持ち上がる展開も似ている。

〈結論〉

トウエインは『若草物語』を読んで、ジョーをトムに、また妹エイミーをトムある

いはベッキーに置き換えた感がある。性格描写をみると、ジョーとトムの男っぽさがよく似ており、妹エイミーとトムとベッキーには強いナルシズムの傾向が見られる。家庭や学校、川を舞台に使うところも似ている。ジョーとトムが読んだ本も共通したものがあり、どちらにも騎士道へのあこがれが見られる。その他、紙幅の関係で述べられなかったが、4人娘が感じる「クリスマス休日の後のつらさ」はトムが感じる「(日曜日の後の)月曜日のつらさ」に、母親マーチ夫人が語る「仕事」論はトムの「仕事」論に受け継がれている感がある。どちらの作品にも「かつら」についての滑稽なエピソードがある。妹エイミーが残す「遺言」のエピソードはトムがシッドに託そうとする「遺言」のエピソードに受け継がれている気がする。ジョー姉妹は新聞を編集し発行するのが趣味であり、トムは最後に町の新聞にヒーローとして掲載されていていい気になっている。また、ジョーもトム（そして仲間たち）も「良心の呵責」で悩む場面があるし、ジョーが見せる神に対する葛藤は後に（『ハックルベリー・フィンの冒険』で）ハックが見せる神との葛藤に引き継がれているといえるかもしれない。トウエインが得意とする、動物を人間なみに（『イソップ物語』や『グリム童話』や『アンデルセン童話』、そして『不思議の国のアリス』のように教訓的ではなく）ユーモラスに扱うところも『若草物語』を受け継いでいる気がする。その他、作品の書き方であるが、物語の途中で時おり作者がナレーターとして登場し、人生についてコメントするところも共通している。

また、『第3若草物語』が影響を与えたと考えられる話題も多く見つかる。「ハック」の原型のような少年の登場や、「洞窟」「たばこ喫煙」「海賊へのあこがれ」「作文発表」「がらくた（＝宝物？）集め」「誓約書作成」「勉強のし過ぎによる精神異常」などのエピソードがある。

本論文で扱えなかった項目のうちいくつかについては稿を改めて論ずるが、本論文で紹介した類似点および上記で紹介した、これだけの類似点があれば、オルコットからトウエインへの文体、話題、そして子供の心理の描き方における影響は認めてよいと考えるものである。

参考文献

- Alcott, L. M. *Little Women* (A Norton Critical Edition, W. W. Norton & Company, Inc., U. S. A., 2004)
- Gribben, Alan *Mark Twain's Library A Reconstruction* (G. K. Hall & Co., Boston, Mass., 1980)
- Reisen, Harriet *Louisa May Alcott The Woman behind Little Women* (Picador, A John Macrae Book, New York, 2009)
- Twain, Mark *The Adventures of Tom Sawyer* (A Signet Classic from New American Library, New York, U. S. A., Scarborough, Ontario, London, England, 1959)
- オールcott『若草物語』松本恵子訳(新潮文庫 1986年)
- マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』大久保康雄訳(新潮社 1953年)